



THE CANON STORY

2024/2025

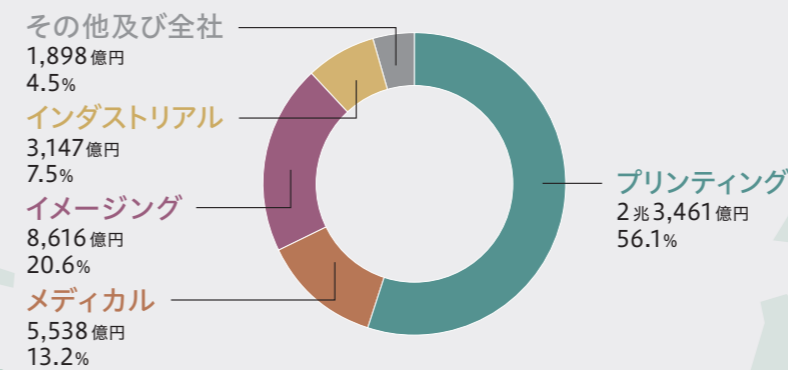
CANON DASHBOARD

2023年12月31日時点

売上高 (2023年)
4兆 1,810 億円

純利益 (2023年)
2,645 億円

ビジネスユニット別売上高 ※2 (2023年)



従業員数
169,151 人

連結子会社数
336 社

EUROPE ※1

売上高
1兆 1,112 億円 (26.6%)
 従業員数
22,651 人

JAPAN

売上高
9,016 億円 (21.6%)
 従業員数
68,532 人

ASIA & OCEANIA

売上高
8,557 億円 (20.4%)
 従業員数
62,023 人

AMERICAS

売上高
1兆 3,124 億円 (31.4%)
 従業員数
15,945 人

主要拠点

- 研究開発・ソフトウェア開発
- ▲ 製造
- 販売
- ◆ その他

※1 キヤノンの公表データではEMEA(ヨーロッパ、中東、アフリカ地域)を欧州としています
 ※2 各ビジネスユニットの連結売上高には、ユニット間消去-1.9%があるため、総計100%になっていません

企業理念

共生

キヤノンの企業理念は、「共生」です。

私たちは、この理念のもと

文化、習慣、言語、民族などの違いを問わず

すべての人類が末永く共に生き、共に働き

幸せに暮らしていける社会をめざします。

しかし、経済、資源、環境など

現在、地球上には共生を阻むさまざまな課題があります。

キヤノンは、共生に根ざした企業活動を通じて

これら課題の解消に積極的に取り組んでいきます。

真のグローバル企業には、お客さま、地域社会に対してはもちろん

国や地域、地球や自然に対してもよい関係をつくり

社会的な責任を全うすることが求められます。

キヤノンは

「世界の繁栄と人類の幸福のために貢献していくこと」をめざし

共生の実現に向けて努力を続けます。

キヤノンの企業DNA

歴史を刻み、発展できた背景には、脈々と受け継がれるキヤノンの企業DNA「人間尊重」「技術優先」「進取の気性」があります。ベンチャー企業として始まった進取の気性と、技術による差別化をめざす姿勢は、深く浸透し、つねにキヤノンは社会に新しい提案をしてきました。それを支えてきたのが実力主義や健康第一主義などの人間尊重の姿勢です。今後100年、200年と発展し続けるために、キヤノンはこの企業DNAを次の世代にしっかりと継承していきます。

三自の精神

キヤノンの行動指針の原点。それが、創業期から受け継がれる「自発・自治・自覚」の「三自の精神」です。企業DNAを伝承しながら、真のグローバルエクセレントカンパニーをめざすキヤノンにとって、いま最も重要な指針となっています。

自発 何事にも自ら進んで積極的に行う

自治 自分自身を管理する

自覚 自分が置かれている立場・役割・状況をよく認識する

人間
尊重

技術
優先

進取の
気性

自 発

自 治

自 覚

目次

- 1 CANON DASHBOARD
- 3 共生
- 5 ごあいさつ
- 7 グローバル優良企業グループ構想
Phase VI
- 9 新しいキヤノン
- 11 プリンティンググループ
- 15 メディカルグループ
- 19 イメージンググループ
- 23 インダストリアルグループ
- 27 未来社会の主役をめざす新規事業
- 31 サステナビリティ
- 33 研究開発
- 35 生産・品質
- 37 マーケティング



時代の変化に沿って、 強靱な意志をもって自らを変え、 さらなる繁栄を図ります。

世界はいま、不透明で波乱要因に満ちた状況に置かれています。一方、進歩を続けるテクノロジーは止まることなく世界を動かし、人々の価値観や生活に大きなインパクトをあたえています。

キヤノンは、AIの加速度的な発展などを見据えながら、事業ポートフォリオを大幅に入れ替えてきました。2021年にスタートさせた中長期経営計画「グローバル優良企業グループ構想フェーズVI」では、プリンティング、メディカル、イメージング、インダストリアルの4つの産業別グループにグループ会社を含めて組織を再編成しました。グループ内での技術交流を深め、将来技術の開発や生産技術の強化を行うことで事業拡大を図り、新事業創出にも注力しています。

1988年、キヤノンが掲げた企業理念「共生」には、すべての人々が文化や習慣などあらゆる違いを超えて、幸せに暮らせる社会を構築し、かけがえのない地球環境を次の世代に引き継いでいくという思いが込められています。いま、さまざまな社会課題の解決が求められるなか、キヤノンは環境対応を加速しながら、より快適でより豊かな生活、ビジネス環境、より安心・安全な社会を支える新たなイノベーションを創出してまいります。

社会のなかで生きる企業にとって、社会とともに変わり続けることは必然とも言えます。キヤノンにとって、変化は進歩であり、変身は前進です。これからも、創業以来のDNAである「進取の気性」「三自の精神」をもって、永遠に技術で貢献し続け、世界から親しまれ、尊敬される真のグローバルエクセレントカンパニーに向け、変身と挑戦を続けてまいります。

みなさまにおかれましては、温かいご支援、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

キヤノン株式会社 代表取締役会長兼社長 CEO

御手洗富士夫

グローバル優良企業グループ構想 Phase VI 2021-2025年

世界で親しまれ尊敬される、真のグローバルエクセレントカンパニーをめざして。キヤノンが大きな変革と成果を追求する中長期経営計画「グローバル優良企業グループ構想」は、1996年にスタートしました。
2021年からは、フェーズVIをスタート。「生産性向上と新事業創出によるポートフォリオの転換を促進する」を基本方針にさまざまな活動を推進しています。



Canon EXPO 2023を開催

事業ポートフォリオを大きく転換し、生まれ変わったキヤノンの新しい姿、キヤノンが提供する未来社会を実感いただくために、「Canon EXPO 2023」を2023年10月に開催しました。横浜・みなとみらいにおける展示会では、最新製品やサービス、それを支える技術、社会へ貢献するソリューション、さらにイノベーションの「種」を紹介。今後、お客さまの期待に応える形で展開し、さらなる変身と進化を果たしていきます。

主要戦略 1 産業別グループの事業競争力の徹底強化

- 製品別事業部制から親和性のある4つの産業別グループへ全社組織を拡大再編成
- グループ視点でそれぞれの技術力や事業領域を再度見直して組織を再強化
- M&Aなども積極的に行いながらグループでの開発や生産の強化を図り、新事業を創出

プリンティンググループ
(→P11)

メディカルグループ
(→P15)

イメージンググループ
(→P19)

インダストリアルグループ
(→P23)

フロンティア事業

ライフサイエンス、マテリアル、ソリューションの領域で、新規事業を育成します。

主要戦略 2 本社機能の徹底強化によるグループ生産性の向上

- 産業別グループの成長戦略を支えるために本社機能を強化し、全体最適を推進

キャッシュフロー経営の徹底

大型投資や経済危機に備え、キャッシュフロー経営を再徹底し、M&Aにともなう借入金の返済を進めて強固な財務体質のさらなる安定性を確保します。

より競争原理の働く人事体制の構築

雇用や就労形態の多様化にあわせ、人事制度を拡充して一人ひとりの生産性向上を図る一方、事業ポートフォリオに沿った人材を育成する教育と社内転職を推進し、「適材適所」を実現します。

グループ一丸となった原価低減活動の推進

開発・設計・調達・製造現場が連携して、自動化や内製化をさらに強化し、コストダウンを推進します。また、全世界最適調達網の整備を進める一方で、ロジスティクスの全体最適化を図ります。

新製品開発のためのイノベーションへの注力と激変する経営環境への対応

各産業別グループの収益に貢献する本社部門の研究開発をさらに強化するとともに、脱炭素や経済安全保障など、経営環境の変化に対して全社横断でいち早く対応していきます。

経営目標 (2025年)

- 売上高 4兆5,000億円以上
- 営業利益率 12%以上
- 純利益率 8%以上
- 株主資本比率 65%以上

グローバル優良企業グループ構想
Phase I-V 1996-2020年

Phase I 1996-2000年

「全体最適」と「利益優先」への意識改革を図り、キャッシュフロー経営を徹底。事業の選択と集中、生産革新や開発革新など、数々の経営革新を始めました。

Phase II 2001-2005年

「全主力事業世界No. 1」を掲げて、製品のデジタル化を一気に推進し、競争力強化に努めながら、全世界のグループ会社の体質改善を進めました。

Phase III 2006-2010年

現行事業の強化、新規事業拡大など、新たな成長への戦略を進める一方で、サプライチェーンマネジメントの徹底やIT革新を実行しました。

Phase IV 2011-2015年

規模の拡大を追求する経営方針の転換を図り、財務体質を強化するとともに、M&Aも実施し、新たな成長エンジンとなる事業基盤の再構築を進めました。

Phase V 2016-2020年

新たな成長に向けて4つの新規事業の拡充に挑み、「戦略的大転換」の第一段階となる事業ポートフォリオの入れ替えを完了しました。

プリンティング

一新された22,000の停留所。
デジタルの力で、すばやく。きれいに。

3か月で22,000の停留所標識の置き換えを支えたデジタル印刷

2023年、ベルギーのフランダース地域で約22,000のバス・路面電車の停留所の標識を3か月の短期間で置き換える一大プロジェクトが敢行されました。プロジェクトの成功に大きく貢献したのは、ブリュッセル近郊に本社を構えるゼニスグラフィクス社。自動車や建物の内外装、標識、機械などを彩る印刷メディアを制作し、貼り付けまで手掛け、建物や車に直接印刷したような印象深い仕上がりで高い評価を得る印刷会社です。

今回のプロジェクトに採用されたのは、キヤノンプロダクションプリンティング^{※1}（以下、CPP）のデジタル印刷機Coloradoシリーズ。高品質モードでも40m²/時の印刷スピード、印刷後すぐに後工程に進める速乾性をもつという高い生産性を備えています。さらに、紫外線で硬化する独自のUVgelインクなどにより、デジタル印刷の課題だった耐久性、傷つきやすさを解消した色鮮やかな印刷を実現。高い品質保証をうたうゼニスグラフィクス社からの厳しい要求をクリアしたのです。

デジタル商業印刷で、作業とメンテナンスの大幅な時間短縮を実現

一方で、停留所には正確な情報の表示が求められます。路線変更が行われるなか、印刷内容を自在に変えられるデジタル印刷ならではの強みを生かし、一つひとつの停留所ごとの名前、路線番号などをデータに基づき確実に印刷。これまでにない短期間で22,000の標識は完成しました。

ゼニスグラフィクス社はさらに2023年に発売された白インク搭載の「Colorado M5W」も導入。透明シートなどに白の下地がつくられ、ディテールまで生き生きとした迫力のある自動車や建物のデカール^{※2}印刷も可能にしました。Coloradoシリーズは、デザイナーやオペレーターから不動の一番人気を誇る印刷機となり、いまや5台が導入されています。

キヤノンのデジタル商業印刷によるさらなるメリットは、色調整やメディア交換、メンテナンス時間の大幅な削減にあります。ゼニスグラフィクス社では、印刷機のメンテナンスに追われていた月曜の午前中もデザインをつくるというメインの仕事に集中。ますますの成功を手に入れようとしています。

※1 デジタル商業印刷機を開発・生産するキヤノンのグループ会社

※2 特殊な用紙・フィルムに印刷し、対象物に転写するステッカーのようなもの



ゼニスグラフィクス社で活躍するColoradoシリーズ



Coloradoシリーズで印刷した停留所の標識

約22,000の停留所ごとに
違う表示を印刷



プリンティンググループ

いつでもどこでも「意のまま」に、
安心・安全・快適にプリント。



クラウドとシームレスに連携するオフィス向け複合機

デジタル社会におけるプリントの価値を追求

デジタル社会が進化するなかでも、ものを考える、共同作業をする、生活を楽しむといった紙がもたらす価値は変わることなく、人間の知的な活動を支えています。

電子写真とインクジェットというデジタルプリンティングの2大技術をいちから開発したキヤノンは、高性能なハードウェアと先進ソフトウェアの連携を表す「サイバーフィジカルシステム」により、家庭やオフィス、そして印刷工場においても、



紙は知を形成するのに不可欠なメディア

いつでもどこでも「意のまま」に、安心・安全・快適にプリントできる社会を実現していきます。

商業印刷・産業印刷のデジタルシフトをリード

書籍やカタログ、ポスター、ダイレクトメール、帳票といった商業印刷は、これまで主流だったアナログのオフセット方式からデジタルシフトが進んでいます。デジタル印刷は1部ずつ内容を変えるバリエーション印刷などができるほか、有機溶剤を



DXを推進する印刷会社のニーズに応える商業印刷機

使わないなど環境面でも優位性があります。キヤノンはオランダに本拠を置くCPPと密接に連携しながら、高解像度・高速のカットシートプリンター・連帳プリンターなどのデジタル商業印刷機や、ポスター、図面などを印刷する大判プリンターを展開。また、ラベルやパッケージといった産業印刷にも本格的に参入し、独自の白インクによって鮮明なカラーラベルを実現するラベルプリンターを開発するなど、印刷会社のニーズに応えています。

オフィスのデジタルトランスフォーメーションに貢献

あらゆる産業でデジタルトランスフォーメーション(DX)への期待が高まるなか、オフィス向け複合機によるDXもいっそう加速しています。使いやすさや低消費電力にも配慮した高性能ハードウェアに、セキュリティ技術や情報蓄積・処理・解析などのデータ活用技術といった先進ソフトウェア技術を掛け合わせ、オフィスのワークフローを自動化・効率化。複合機とクラウドをシームレスに一体化したサービスによって、オフィスの本格的なDXを推進しています。



仕事・プライベートで使い分けできるインクジェットプリンター

家庭でのあらゆるプリントのニーズに応える

働く場所のバリエーションがひろがり、家庭でのプリント機会が増えています。キヤノンはオフィス向け複合機のプリントマネジメント技術を発展させ、自宅でもオフィスと同じセキュアなプリンティング環境を提供。仕事や学習の効率化や生活を楽しむプリンティングなど、それぞれのニーズに応えられるように、大容量インクのインクジェットプリンターや小型のレーザープリンター、モバイルプリンターなどのラインアップをそろえています。



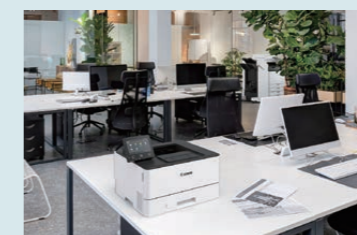
快適なスキャンができるレーザープリンター

省エネルギー、小型化、リサイクル……環境配慮をつねに先駆け

キヤノンは、いち早くプリンターのCO₂削減・資源循環につながる取り組みを実践してきました。1990年代初めにプリント時以外にヒーターを温める必要のない「オンデマンド定着方式」を開発し、複写機に圧倒的な省エネルギーをもたらす一方で、使い捨てが当たり前だった当時、爆発的に普及したレーザープリンターのトナーカートリッジの回収リサイクルを実現。さらに、オフィス向け複合機のリマニュファクチャリング[※]など、環境のトップランナーとして蓄積してきた技術はキヤノンの「グリーンプラットフォーム」(→P31)の重要な要素の一つとなっています。

現在もレーザープリンターの小型化、低融点トナー開発による省エネルギーなどを推進し、CO₂削減と資源循環をリードしています。

[※] 使用済み製品を分解し、洗浄・部品交換などを行い、新品同様の品質で再組立すること



小型化を追求したレーザープリンター



オフィス向け複合機のリマニュファクチャリング

メディカル

立ったままでのCT検査。 健康長寿がさらに進む時代へ。

原因がわからなかった痛みの診断が期待される立位CT

脳や心臓をはじめとした全身のさまざまな部位の精密検査で、体内のわずかな変化をとらえ、病気の早期発見に貢献するX線CT(コンピューター断層撮影)装置。ドーナツ形になっている「ガントリ」のなかのX線管と検出器が対になって患者さんの周囲をジェットコースターの8倍にもなるすさまじい重力で回転し、体の断面画像を高精細に撮影します。

そんなCT装置が、いま、さらなる進化を遂げようとしています。それは、患者さんが横たわった状態(臥位)で撮影するという常識をくつがえし、立ったままで撮れる「立位CT」。先端医療をリードする慶應義塾大学病院とCTの歴史を塗り替え続けてきたグループ会社キヤノンメディカルシステムズ(以下、キヤノンメディカル)が共同で開発しました。嘔下^{えんげ}・排尿・歩行など立ったり座ったりして行う活動の異常や、立っている時だけ現れる腰や膝の痛みの原因など、これまで難しかった診断での活用が期待されています。

※ 嘔下:食べ物などを飲み込み、口から胃へと運ぶ一連の動作

健康長寿の危機を早期に見抜き、治療につなげる

立位での検査は姿勢が安定せず、長時間撮影では画像がぶれてしまいます。世界で初めて^{*}0.35秒で16cm幅320列を撮影する高速・高精細CTを実現したキヤノンメディカルの技術力に、立位CTの可能性を感じた慶應義塾大学が注目して共同開発が始まりました。すさまじい遠心力がかかっているガントリを上下に移動させながら撮影するという難題もこれまで培った技術の粋を尽くし、解決。立位CTなら靴を脱いで横になる必要がないため、検査時間が短縮できるだけでなく、完全非接触なので感染症リスクの回避にもつながります。

高齢化が進み、健康寿命が重視されるなか、慶應義塾大学病院では、健康に影響する機能の衰えや病気の早期発見、また、臥位との画像比較により、骨盤底筋の緩みや心不全の重症度の判定にも有効とみて臨床研究を進めています。

立位CTの歴史はまだまだ始まったばかりです。健康長寿をめざす社会の期待に応えられるよう、キヤノンは立位CTの可能性を追求し続けます。

※ 2018年1月時点(キヤノン調べ)



嘔下撮影専用のいすや車いすに座っての「座位」撮影も可能



慶應義塾大学病院の臨床研究では立位と臥位のCT画像を比較



慶應義塾大学病院で使われている立位CT、0.275秒の撮影で16cm幅、320列を撮影

患者さん一人ひとりにあわせた治療を行うために。
医師の的確な診断を技術で支えます。



高画質と低被ばくを追求し、より正確な診断と患者さんの負担軽減に貢献するCT装置

ひろがり続けるヘルスケアへのニーズ

高齢化社会の進展やパンデミックの発生などを背景に、健康増進や病気の予防、高度な検査・診断・治療といったヘルスケア分野へのニーズがさらにひろがっています。医療従事者の負担が増すなか、キヤノンは、医療機関や大学など国内外のパートナーと連携しながら、先端技術によるより良質な医療の提供に、グループ一丸となって取り組んでいます。

キヤノンメディカルを核に事業展開

「画像診断」「ヘルスケアIT」「体外診断」の3つの領域で高度な医療への期待に応えるキヤノン。その中核を担うキヤノンメディカルは、尊いいのちを守る医療に貢献したいという想いを込めた「Made for Life」をスローガンに、臨床現場の課題解決に努めています。

一方で、メディカルグループ全体でグローバル化を加速。医療機器において世界最大の市場規模と影響力をもつアメリカで、先端医療機関や研究者との関係を深めるとともに、世界各地でさまざまな協業を推進しています。

新しい医療価値をつくり出す画像診断装置

高度な医療は、画像診断なしに考えることはできません。CTやMRI(磁気共鳴画像)、PET-CT^{※1}、超音波といった画像診断装置において、キヤノンはディープラーニング^{※2}を使った画像のノイズ除去技術を搭載。高精細画像で病気の早期発見に寄与するとともに、被ばく低減や検査時間短縮により、患者さんの負担も軽減しています。さらに、X線装置は、



ディープラーニング^{※2}を活用し画像ノイズを低減。静音も強みのMRI装置



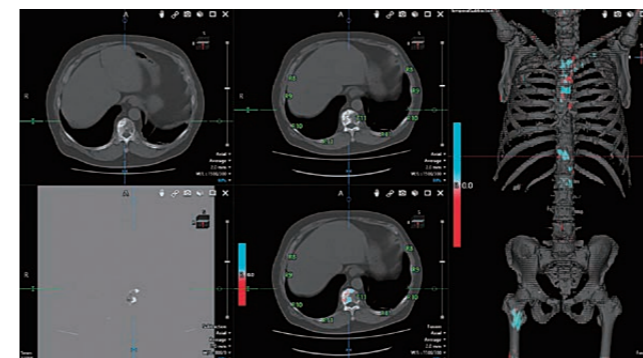
兵庫医科大学病院で、肝臓の精密検査に利用される超音波診断装置

手術中の血管透視に使われるなど、治療の分野でも活躍しています。

※1 臓器の姿を描写するCT画像と、放射性薬剤を体内に投与して撮影を行うPET画像を同時に撮影できる装置
※2 ディープラーニングは、設計段階で用いており、製品自体に自己学習機能はありません

医療従事者の負担を減らす「ヘルスケアIT」

近年、画像の高精細化や情報量の増加によって医師の「読影」の時間が飛躍的に増え、大きな負担になっています。キヤノン



骨の経時変化観察をサポートする読影支援ソフトウェア

は、臨床で集められた豊富な画像データを活用し、AI^{※3}を使って解析結果を表示することで、脳卒中やがんの骨転移などの読影を支援。また、患者さんの診断画像や投薬履歴、日々の体温や血圧などの時系列統合表示を実現するなど、医療従事者の負担軽減に向けたDXにも注力しています。

※3 AI技術は、設計段階で用いており、製品自体に自己学習機能はありません

検査スピードに優れた体外診断システムを提供

体外診断では、高速で大量の検体検査ができる臨床化学自動分析装置を展開する一方で、診断薬事業も手掛けるなど、臨床検査のトータルソリューションの提供をめざしています。また、新型コロナウイルスをはじめ、感染症の流行時には試薬や検出システムを開発。社会のニーズにいち早く応え続けています。



新型コロナウイルスを短時間で検出する抗原検査システム

フォトンカウンティングCTの実用化に向けて臨床研究に注力

いま、次世代CTとして注目されているのが、フォトンカウンティングCT(以下、PCCT)です。従来のCTとは違い、X線光子を直接電気信号に変換できるため、画質はノイズが少なく高精細。撮影時のX線量を減らすことによる患者さんの負担軽減、腫瘍の悪性度判定など体内物質識別の実現にも期待が寄せられています。キヤノンは、CTの技術とノウハウを駆使し、ばらつきがなく安定した性能を発揮するPCCTの開発を加速。国内外の医療機関や大学と共同で早期の実用化に向けた臨床研究を進めています。



国立がん研究センターで臨床研究が行われているPCCT

イメージング

来園者の安全を見守り続け、 夜間の動物も見守る動物園。

親しまれる動物園を人の目だけで見守り続けることは大変

1859年に開園し、北欧最古そしてヨーロッパでも有数の歴史をもつデンマークのコペンハーゲン動物園。広大な敷地に現在250種4,000以上の動物たちが集い、動物たちとの近い距離感が魅力となって、多い時には年間150万人以上が訪れる人気スポットです。しかし、現場のスタッフたちにとって、多くの来園者と動物たちを人の目だけで見守り続けることには限界がありました。

そこで約7年前に取り入れられたのがネットワークカメラシステムです。動物園では、来園者の見守りだけでなく、夜行性も多い動物たちの行動観察や、出産や病気の兆候もつかみたいと、暗がりでも高画質が得られることを求めて選考。選ばれたのは、キャノンのグループ会社アクシスコミュニケーションズ(以下、アクシス)とマイルストーンシステムズ(以下、マイルストーン)の多様なネットワークカメラとビデオ管理ソフトウェアでした。



マイルストーンのビデオ管理ソフトウェアを用いた飼育員による動物の見守り



アクシスで行われているネットワークカメラの堅牢性テスト

暗がりでも高画質、そして堅牢性が必要な動物園のネットワークカメラ

チンパンジーなど好奇心の強い動物はカメラにも興味津々で、たいたたりすることもよくあります。たたく力は想像以上に強く、堅牢性に優れたカメラが必要です。多彩なラインアップをもち、厳しい品質検査を受けるキャノングループのネットワークカメラはここでも威力を発揮。いたるところから映像をチェックできる映像管理ソフトウェアも高く評価され、カメラはいまや200台以上が設置されています。もちろん、来園者の見守りでも、危険な場所への立ち入りがあれば、すばやくスタッフが駆け付けられるようになるなど、効率化に大きく貢献しています。

また、サイの赤ちゃんの誕生時にはデンマークの公共放送でネットワークカメラ映像が放映されるなど、動物園にとって欠かせない存在になったキャノンのネットワークカメラシステム。お客さまそれぞれのニーズにカメラとソフトウェアの多彩な組み合わせで応え、世界中で活躍の場をひろげています。

動物園で来園者や動物を見守るキャノングループのネットワークカメラ



イメージンググループ

暮らしを彩る。社会のインフラを支える。
イメージングの可能性はひろがり続けます。



動きが速いスポーツの撮影でも活躍するミラーレスカメラと超望遠レンズ

社会の未来を切り拓く光学技術

カメラと映像の世界をリードしてきたキヤノンのイメージング技術は、その可能性をさらにひろげ続けています。創業時から培ってきた「光学技術」とAIなどの「デジタル技術」を組み合わせ、人々が「幸せを感じる」ような映像体験を提供することはもちろん、街の安心・安全や工場の自動化など、社会インフラの進化にも貢献。映像解析、VR・AR・MR、ロボットの「眼」など、新しい技術をさらに発展させ、明るい未来を開拓していきます。



ミラーレスカメラに装着し、180°の3DVR映像撮影を実現するVR専用レンズ

安心・安全と効率化を実現するネットワークカメラ

防犯や防災など、社会を見守るインフラの一部となっているネットワークカメラシステム。キヤノンは、カメラ本体や映像解析ソフトウェアなど、さまざまなかたちで社会課題に対するソリューションを提供してきました。これからも道路の交通量監視や製造現場での安全確保、医療・介護施設における状況把握など、持続可能な社会に欠かせないDXを推進するソリューションを発展させ、スマートシティの実現に貢献していきます。



品質検査に使われているネットワークカメラ

写真・映像文化の発展をつねにリード

最先端のその先を追求してきたカメラ事業も、進化を止めることはありません。動画・静止画ともに「快速・快適・高画質」を追い求めるレンズ交換式カメラ「EOS」は、ミラーレスカメラを中心に、撮影者にとって理想の表現を追求する多種多様なレンズとともに、初心者からプロまで幅広い層から高い人気を集めています。また、手軽に高画質・高音質撮影が楽しめるVlogカメラなど、ニューコンセプトカメラも展開。さらに、臨場感のある3D映像でエンターテインメントなどさまざまな分野に新しい楽しみ方を可能にするVRシステム、開発や生産の現場で活躍するMRシステム(→P30)など、高画質と効率性を実現するXRシステムをいち早く提供するなど、新たな映像体験をリードし続けています。



かんたん、手軽に動画撮影ができるVlogカメラ



スポーツ中継で活躍する4K放送用レンズ



映画の本場ハリウッドでも使われるデジタルシネマカメラ



忠実な色表現が可能な業務用4Kディスプレイ

臨場感あふれる映像制作を実現

高い光学性能と使いやすさを同時に実現する放送用レンズを核に、世界中の放送局や制作会社から絶大な支持を得ているキヤノンの放送機器。プロフェッショナルの要求に応え、色再現や人肌の表現、操作のしやすさに定評のあるデジタルシネマカメラ「CINEMA EOS SYSTEM」や業務用4Kディスプレイなど、入力から出力まで一貫したソリューションを提供しています。

さらに、自由な視点で映像がつけられるボリュメトリックビデオシステム(→P30)や、映像制作現場の効率化に貢献するリモートカメラシステム(→P29)などを実用化。これまでになかった映像表現を可能にしています。

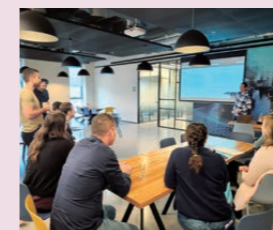
カメラ、映像管理、映像解析を自在に組み合わせたソリューション



アクセス(本拠スウェーデン)



マイルストーン(本拠デンマーク)



ブリーフカム(本拠イスラエル)



アーキュリーズ(本拠米国)

ネットワークカメラにおけるキヤノンの強みは、カメラ本体、カメラ映像を録画・管理するビデオ管理システム(VMS)、映像解析ソフトウェア(VCA)というシステムすべての要素をグループ内にもつことです。カメラのみならず顔認証などのVCAも提供するキヤノン株式会社、AIによる映像解析を搭載したカメラを手掛けるネットワークカメラ世界大手のアクセス、13,000機種以上のカメラと連携できるVMSを展開するマイルストーン、映像解析技術に優れるブリーフカム、映像監視クラウドサービスを提供するアーキュリーズが一丸となってシナジーを發揮し、お客様の課題にあわせたソリューションを構築します。

そして、さらなる強みは「オープンプラットフォーム」。他社のカメラやアプリケーションと自由に組み合わせて、システムの構築・拡充が自在に行えます。

インダストリアル

半導体そのものが進化する。 半導体生産も大きく進化する。

半導体デバイス生産のゲームチェンジャー「ナノインプリント」

いまの便利な生活に欠かせない半導体デバイス。自動運転、メタバース、生成系AIなど、これからの社会を変える技術も半導体デバイスの進化なしには実現できません。半導体ウエハー^{※1}の上に細かな電気回路をくり返し形づく半導体デバイスの生産においては、ウエハーに塗られた樹脂材料(=レジスト)に回路パターンを描くプロセスが重要です。いまは光をレンズで制御して焼き付ける「露光装置」が主流ですが、デバイスの高性能化のために回路線幅を細くすればするほど、大規模な光源装置などが必要になり、電力消費も莫大になっています。

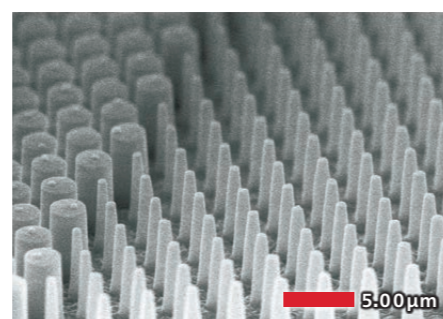
この半導体生産の考え方そのものを大きく変えると期待されるのがキヤノンのナノインプリントリソグラフィ(NIL)技術です。超高精細な型(=マスク)をスタンプのようにレジストに押し当てて回路を形づくるシンプルな方式のため、装置は小型化。消費電力も大幅に削減します。

※1 薄板状にスライスした半導体

最先端半導体デバイスだけでなく、ナノレベル3D構造物の作製にも期待

いま、最先端のロジック半導体デバイス^{※2}の製造レベルは5ナノメートル^{※3}。最小で14nm(ナノメートル)という回路線幅が求められます。1mmの10億分の1というナノの世界では、微粒子の混入や重ね合わせ精度、マスクをレジストからはがす技術がネックでしたが、キヤノンは半導体製造装置で培った位置合わせ制御技術や計測技術、微粒子の発生や混入を抑制する新技術によって解決。ついに2023年、5ナノメートルに対応するナノインプリント半導体製造装置を発売し、従来比10分の1の電力での量産を可能にしました。そして次世代2ナノメートルの実現も期待されています。

また、ナノインプリントなら半導体デバイスだけでなく微細で複雑な3D形状も低コストで実現。たとえば、可視光の波長以下の3D構造によって光を制御するフラットレンズも夢ではなく、さまざまな産業で起こるナノインプリントによるブレイクスルーも今後の大きな楽しみです。



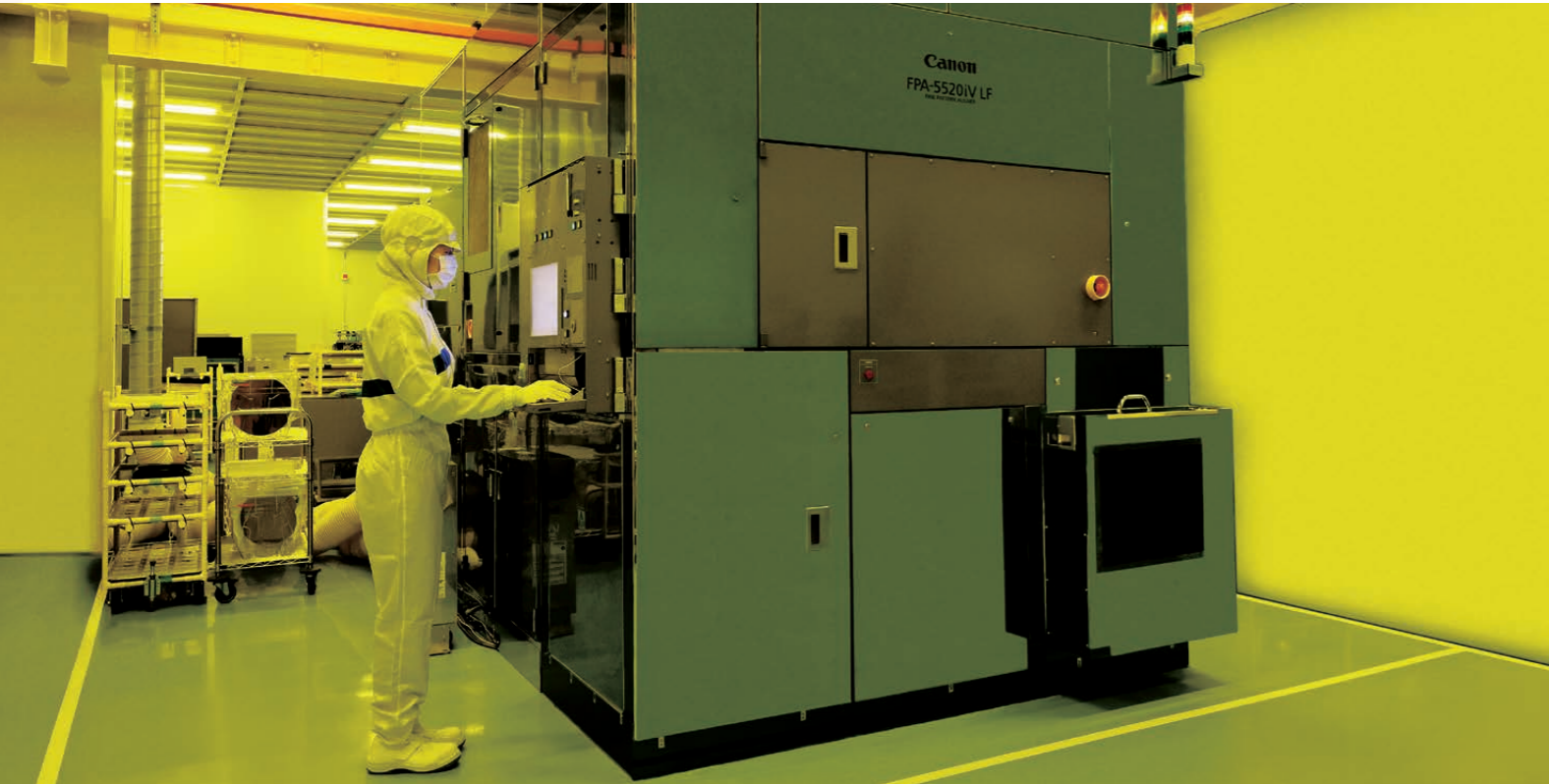
ナノインプリントリソグラフィで一括形成した微細で複雑な構造

※2 CPU(中央演算処理装置)など、電子機器の「頭脳」として、データ処理、機器の制御などを行う半導体デバイス

※3 半導体製造プロセスの技術世代の呼び名



半導体やディスプレイの進化を 超精密技術で実現します。

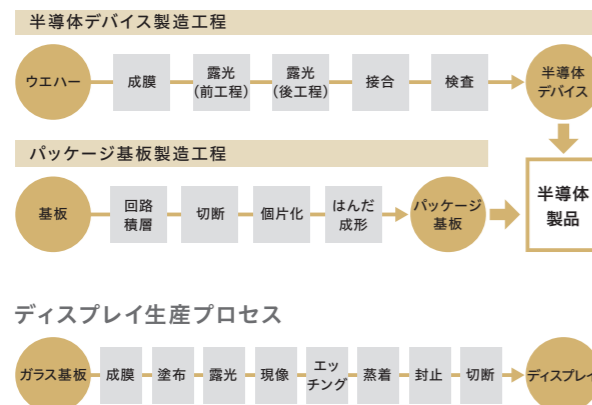


複数の半導体チップを高密度で接続する先端半導体パッケージ向け露光装置

先端エレクトロニクスのものでつくりを支え続ける

豊かなサステナブル社会に向け、エレクトロニクス産業の進化がさらに求められています。特に半導体は、あらゆる機器のコントロールやデータ処理を行うロジック、メモリー、センサー、省エネに欠かせないパワーデバイス、通信用など、あらゆる産業の技術ベースになっています。

半導体デバイス生産プロセス



キヤノンのインダストリアルグループでは、半導体のほか、人とITをつなぐ入口・出口となるディスプレイ、産業機器分野で広く使用される計測機器、生産のDXを進めるデータソリューションの4つの領域で、超精密技術とこれまでのノウハウを注ぎ込んださまざまな製造ソリューションを展開。社会の発展に必要なものづくりの進化を支えます。

半導体製造プロセスを幅広くカバー

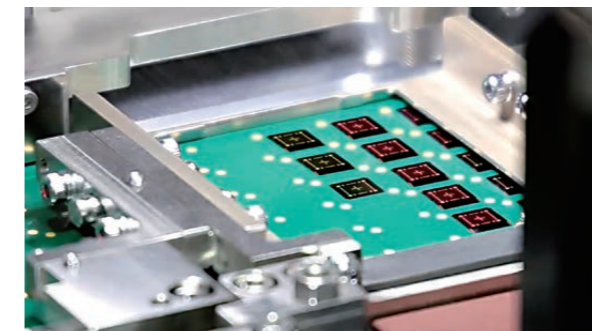
1970年に国内初の半導体露光装置を発売して以来、キヤノンは、複雑で超精密な動作が求められる半導体製造プロセスを幅広くカバーし、半導体デバイス生産に貢献してきました。「露光」プロセスでは現在、ロジックやメモリー、5G通信、車載向けパワーデバイスなどに用いられる、i線(水銀)やKrF(フッ化クリプトン)を光源とする露光装置が世界中で活躍。DXを推進するリモートサービスも展開し、半導体デバイスメーカーの生産性向上に貢献しています。

また、「成膜」プロセスではグループ会社キヤノンアネルバが真空成膜技術で金属薄膜を形成するスパッタリング装置

などを手掛け、「接合」プロセスでは自動化・省力化機器を生産するキヤノンマシナリーが薄いダイ(=半導体チップ)をハンドリングするダイボンダーを展開。キヤノントッキを含めたグループ3社が技術をもち寄り、新たな事業ドメイン開拓にも注力しています。

さらに、複数の半導体チップの重ね合わせや、GPU[※]やメモリーなど複数機能のチップを集積する「パッケージング工程」では、高密度の接続と「つなぎ露光」でパッケージの大型化を実現する装置も提供し、半導体デバイスの高性能化を後押ししています。

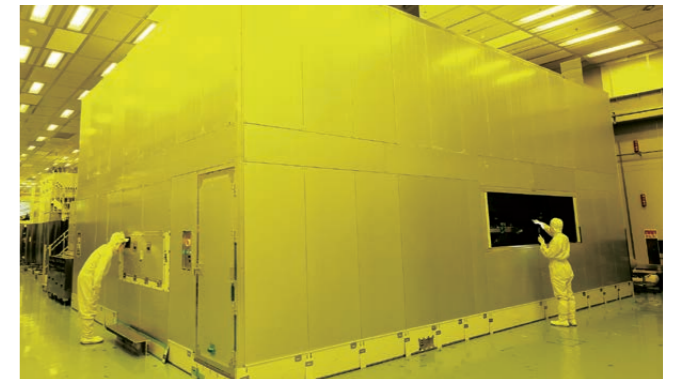
※ Graphics Processing Unit。AIやゲーム向けの演算処理デバイス(プロセッサー)



高速・高精度でダイの接合を行うキヤノンマシナリーのダイボンダー

高精細ディスプレイをつくり出すFPD露光装置

液晶ディスプレイや有機ELディスプレイの生産においても重要な「露光」と「蒸着」のプロセスをキヤノンは担っています。フラットパネルディスプレイ(FPD)露光装置は、大型の基板に極細のディスプレイ回路を描く装置で、スマートフォンやタブレット、PC、大画面の高精細テレビなど、液晶・有機EL

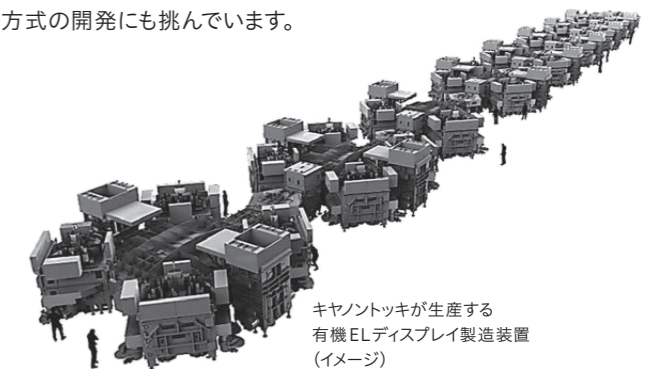


ガラス基板にディスプレイの回路を焼き付けるFPD露光装置

を問わず、美しいディスプレイの生産を超精密技術で支えています。

有機ELディスプレイの普及をけん引

漆黒の黒色まで表現しながら省電力、薄型・軽量という点にも優れ、スマートフォンから大画面テレビにいたるまで急速に利用がひろがる有機ELディスプレイ。さまざまな課題から不可能とされていた量産装置を世界に先駆けて製品化し、以来、増え続ける需要を一手に引き受けてきたのがグループ会社キヤノントッキです。量産をリードするだけでなく、新たな製造方式の開発にも挑んでいます。



キヤノントッキが生産する有機ELディスプレイ製造装置(イメージ)

半導体デバイスの増産を支えるデータソリューション「Lithography Plus(リソグラフィプラス)」

超極細の回路を描く半導体露光装置には定期メンテナンスやチューニングなどが不可欠です。しかし、生産のスピードアップや歩留まり^{※1}向上をめざす半導体デバイスメーカーは、限りなく停止ゼロの状態を望んでいます。

この期待にDXで応えるサービスが、キヤノンの「Lithography Plus」です。装置からリモートで情報を取得。装置の状態から部品交換やメンテナンスの計画立案をサポートします。また、異常の予兆を検知して自動復旧も実行。復旧に人手が必要な手順を紹介するほか、キヤノンのエンジニアによるリモートサポートも行います。

さらに、生産開始時には、製造のノウハウなどを凝縮したレシピ^{※2}を提供。つくり始めから高い歩留まりの達成をサポートします。

※1 生産された製品のうち良品の割合
 ※2 デバイスや製造プロセスごとの製造条件

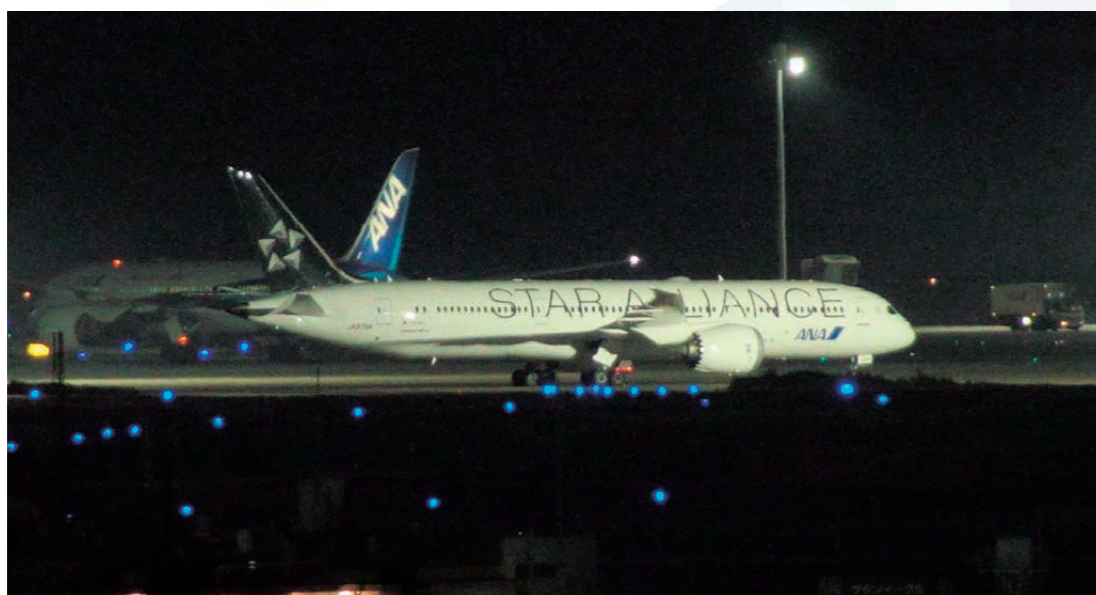


生産現場の映像を見ながらアドバイスを送るキヤノンのエンジニア

未来社会の主役をめざす

新規事業

強い技術を複合的に組み合わせ、
新しい事業がつぎつぎと育まれています。



夜間に羽田空港から7km以上離れた地点から超高感度カメラ「MS-500」がとらえた映像

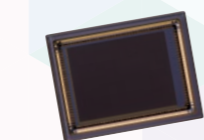
暗闇でもカラー映像が撮影できる超高感度カメラを実現。 さらに幅広い活躍が期待されるSPADセンサー

キヤノンは、2023年世界で初めて^{※1}カラー撮影用SPADセンサーを搭載した超高感度カメラ「MS-500」を発売。超望遠性能に優れたキヤノンの放送用レンズとの組み合わせにより、闇夜でも数km先の被写体を鮮明に撮影することができ、港湾や公共インフラ施設など、昼夜を問わず正確に対象をとらえる高度な監視システムのニーズに応えます。

SPADセンサーは、光に粒子の性質があることを利用して、画素に入ってきた光の粒一つひとつ(フォトン)を数えるセンサーで、暗闇でも被写体を鮮明にとらえる高感度性能を備えています。2021年、キヤノンは世界最高画素数^{※2}320万画素のSPADセンサーの開発に成功。感度領域を画素全体にひろげる独自の構造によって、小型でありながら高画素化と高感度の両立を実現しています。

また、SPADセンサーには、100ピコ秒(100億分の1秒)レベルの非常に速い時間単位で情報を処理できるという特長があります。1秒間に約30万km(地球7.5周分)という速さの「光」の軌跡もとらえることができるほどの性能を生かし、今後、自動運転や医療用の画像診断機器、科学計測機器など、幅広い分野での活躍も期待されています。

※1 カラー撮影用のSPADセンサー搭載カメラとして。2023年7月31日時点(キヤノン調べ)
※2 SPADセンサーにおいて。2021年12月14日時点(キヤノン調べ)



キヤノンが開発した320万画素SPADセンサー

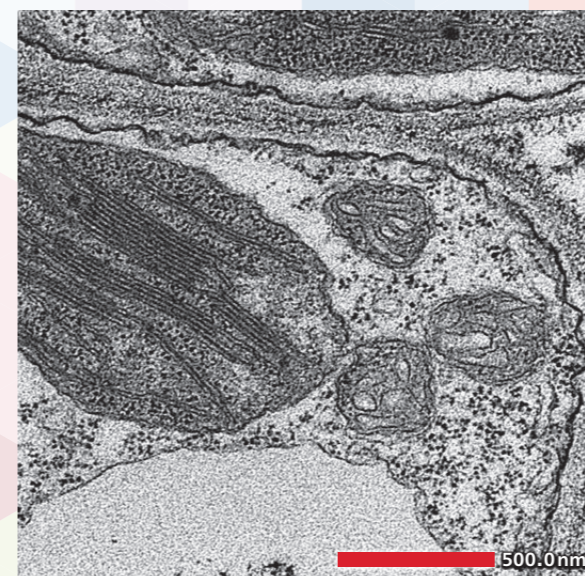


世界初SPADセンサー搭載のレンズ交換式超高感度カメラ「MS-500」

SPADセンサー
くわしくは
[こちら](#)へ



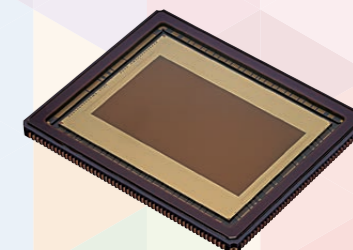
MS-500
くわしくは
[こちら](#)へ



キヤノンCMOSセンサー搭載の電子顕微鏡で撮影したニンジンの葉
画像提供:日本電子株式会社

天体観測から電子顕微鏡まで幅広く活躍 CMOSセンサー

CMOSセンサーはカメラやスマートフォンのイメージセンサーとして活躍しています。キヤノンでは、超多画素、超高感度、HDR[※]などの特徴をもち、セキュリティ、医療、天体、宇宙など専門的な分野で使われるCMOSセンサーをラインアップ。一定範囲の光を一度に取り込むことにより、高速移動する被写体もゆがみなくとらえるグローバルシャッターを備えたCMOSセンサーは、映像撮影のみならず、電子顕微鏡にも採用されています。



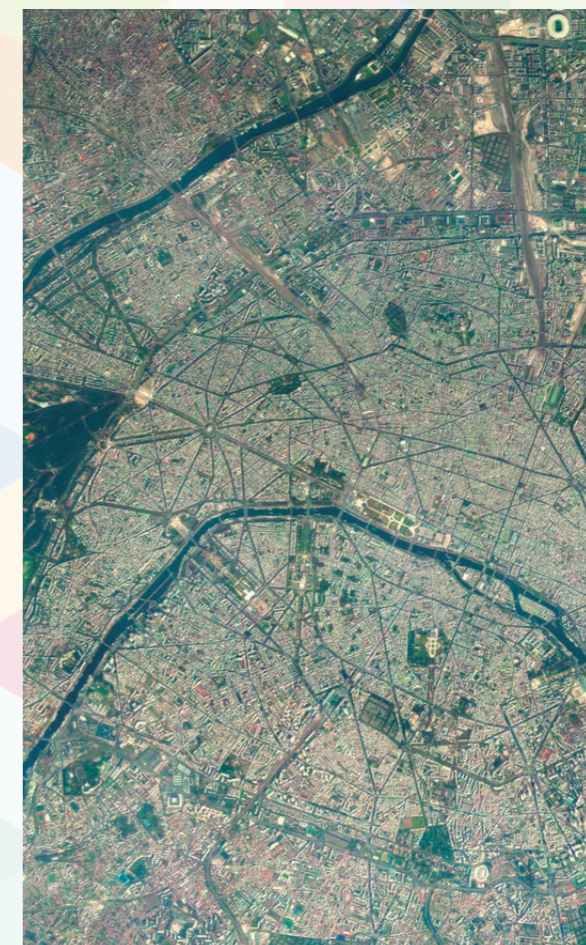
電子顕微鏡搭載と同型のCMOSセンサー

※ ハイダイナミックレンジの略

人工衛星の開発・生産から打ち上げまで 宇宙ビジネスに挑戦

ロケットや人工衛星の開発・生産や打ち上げから、通信、衛星画像・位置情報サービスなど、宇宙ビジネスはこれからの大きな成長が見込まれています。

グループ会社キヤノン電子は、精密機械技術や光学技術を生かし、宇宙ビジネスへ進出。すでに自社開発・生産の超小型人工衛星3基が宇宙へと送り出され、さまざまな自社開発のセンサー、メカ部品によって高精度に姿勢制御しながら、地表や天体を撮影。画像を地球に送り続けています。さらに、キヤノン電子関連会社のスペースワンは和歌山県串本町に日本初の民間ロケット発射場を完成させ、ロケット打ち上げに挑戦しています。



姿勢制御の改善などにより、広域の高解像度衛星写真を実現(フランス・パリ)



くわしくは
[こちら](#)へ



2024年2月に地上約670kmの軌道に乗ったキヤノン電子3基目の超小型人工衛星

未来社会の主役をめざす新規事業

映像制作に新たな可能性を拓く リモートカメラシステム

スポーツやアーティストのライブ映像の撮影などでは、撮影に十分な人員や場所を確保できない場合があります。そのような時でも決定的な瞬間や感動的なパフォーマンスを逃さず撮影できるように、キヤノンはイメージングとネットワーク技術を融合し、LAN回線で最大200台のカメラを制御するリモートカメラシステムを提供しています。

手動撮影と自動撮影を組み合わせるシステムでは、手動でメインカメラを操作する撮影者の指示を反映して、さまざまな位置からリモートカメラが自動撮影を実行します。被写体を自動で追尾したり、メインカメラが追っていない別の被写体も自動で撮影。撮影者が邪魔になり入り込めない場所からの映像など、これまで目にしたことのないリモートカメラならではのシーンの撮影も実現します。もちろんリモートカメラ自体は、業務用ビデオカメラ同等の高画質PTZ*カメラを撮影環境にあわせて用意。高画質と撮影ワークフローの効率化を両立し、ハイクオリティ・低コストの撮影、新たな視点の映像表現を実現するシステムとして期待されています。

※ PTZはPan(水平振り)、Tilt(垂直振り)、Zoom(ズーム)を指します



メインカメラの撮影者による指示でリモートカメラが作動



さまざまな機器がつながるリモートカメラシステム



モビリティ分野での利用が期待されるコーティング材料(イメージ)

反射防止、防汚、光の吸収などを実現する 高性能コーティング材料

キヤノンはカメラレンズの開発を通じて、光の反射を防ぐ透明反射防止材料や、雨でも水滴をつくらなばかりか汚れまで流し落とす親水性材料、光を効率的に吸収する黒色反射防止材料など、独自のコーティング材料を実用化してきました。いま、これらの高い機能をもった材料をイメージングだけでなく、社会のさまざまな課題やニーズに応えるソリューションとして新たな事業展開をめざしています。

たとえば、ガラスの表面に親水性コーティングを施すことで、雨水は水滴にならずに濡れひろがり、汚れを流し落とす「セルフクリーニング」機能をもたせることができます。また、抗菌や抗ウイルス成分を親水コーティング材料に内包させる技術の開発に成功。キッチン・サニタリー分野での利用も期待されます。



高精細な画像を撮影するサービスも提供

コンクリートの老朽化をAIで見つけ出す インフラ点検ソリューション

世界中で進む社会インフラの老朽化への対応を支援するサービスとして、キヤノンは橋梁やトンネルといったコンクリート構造物の点検ソリューションを展開しています。

キヤノンの高性能カメラと交換レンズを自動雲台*やドローンと組み合わせ、豊富な撮影ノウハウを用いて幅0.05mmのひび割れもとらえる撮影サービス、複数の撮影画像の精緻な合成・あおり補正や点検箇所を隠す遮蔽物除去もできる画像処理サービス、ディープラーニングを用いたAIにより、ひび割れ・鉄筋露出・はく落などを見つけて出す変状検知サービスを提供。高度で効率的な点検を可能にしています。

くわしくは
こちらへ



※ カメラに取り付け、向きや角度を調節する台

現実空間にCGを実物大で表示 MRシステム



HMDで見る現実空間にCGを実物大で表示

CGのみで表現するVR(Virtual Reality=仮想現実)から一歩踏み出して、現実世界とCGを融合し、まるで目の前に現物があるかのような臨場感あふれる体験を提供するのがMR(Mixed Reality=複合現実)システムです。キヤノンは、ヘッドマウントディスプレイ(HMD)に搭載されたカメラで撮る映像に、3D-CADなどからつくられたCGを、ユーザーの動きに追従する位置合わせ技術を使って合成し、圧倒的な臨場感を実現。視野角の拡大、HMDの軽量化などの改善を重ね、製造業をはじめ、マーケティング、エンターテインメント、教育のツールとして活躍の場をひろげています。



軽量で装着感も
快適なHMD

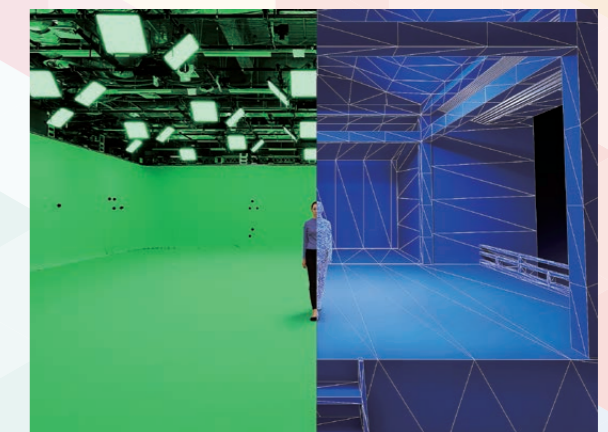
くわしくは
こちらへ



自由視点映像、XR用3Dデータを瞬時に作る ポリメトリックビデオシステム

多数のカメラで撮影した映像をもとに空間全体を3Dデータ化し、自由な位置や角度から映像を見られるようにしたポリメトリックビデオ技術。キヤノンは先駆者として、ラグビーやサッカー、バスケットボール、野球などのスポーツ中継や、エンターテインメントなど、さまざまな分野でこれまでになかった映像体験を提供してきました。2023年には東京・虎ノ門ヒルズに業種や領域を超えた企業やクリエイターとの共創の場として、撮影から配信まで一貫したサービスを提供するスタジオを開設。ポリメトリックデータを使ったライブなどを世界に向けて発信しています。

くわしくは
こちらへ



リアルな画像(左)から3D空間データを生成

サステナビリティ

キヤノンは企業理念「共生」のもと、持続可能な社会の実現に向けて、積極的にサステナビリティ活動を推進してきました。

豊かな生活と地球環境の両立に向け、社会課題の解決に貢献するとともに、製品ライフサイクル全体で環境負荷を低減。

さらに、社会文化支援活動にも率先して取り組んでいます。

気候変動・資源循環への取り組み

製品ライフサイクルを通じたCO₂排出量を2050年にネットゼロとすることをめざしています。

排出削減に積極的に取り組み、SBTi[※]認定を取得した2030年までの排出削減目標を確実に達成していきます。

また資源を繰り返し使い続けるリサイクルなどを世界5拠点で実践しています(→P14)。

※ Science Based Targets initiative 科学的根拠に基づいた温室効果ガス排出削減目標設定を推進する国際イニシアティブ

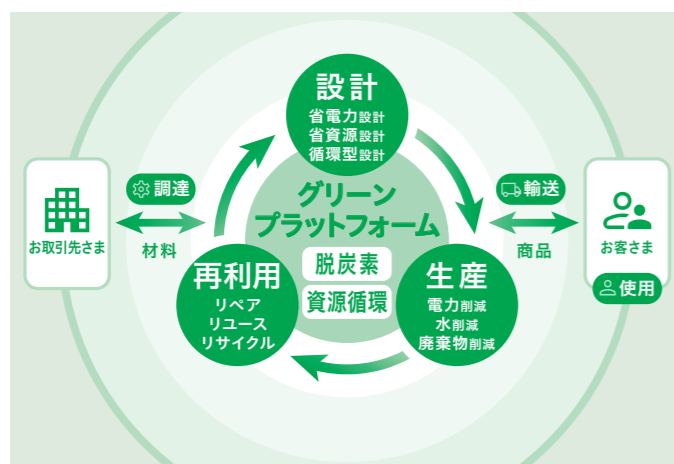
人権尊重の取り組み

人権尊重や人権保護への姿勢を表明する「キヤノングループ人権方針」を定め、人権デュー・デリジェンス、救済メカニズムの整備・運用、人権啓発活動、ステークホルダーとの積極的なコミュニケーション、サプライチェーンにおける人権リスク対応などを実施しています。

コーポレート・ガバナンスの取り組み

経営における透明度の向上と執行監督機能の強化が企業価値の継続的向上に不可欠という考えのもと、さまざまな会議体や委員会の実効性を高め、健全なコーポレート・ガバナンス体制を確立しています。

くわしくは
サステナビリティ
サイトへ



キヤノンのグリーンプラットフォーム

グリーンプラットフォーム

キヤノンはものづくり企業として脱炭素や資源循環の実現に貢献することを重視し、設計・生産・再利用といった製品ライフサイクルの各ステージで環境配慮のしくみや技術を全社的な技術基盤「グリーンプラットフォーム」として蓄積・活用しています。

今後、技術の高度化や新たな領域への取り組みによってグリーンプラットフォームを進化させ、環境負荷のさらなる低減を図っていきます。

キヤノングループ環境活動のシンボル「キヤノエコテックパーク」

キヤノエコテックパークは、これまでのリサイクルのイメージを覆す「クリーン&サイレント」をコンセプトにトナー・インクカートリッジの自動リサイクルラインを完備し、高度な資源循環を実現しています。また、体験型のショールームを併設し、工場見学や小学生向けのオンライン環境授業なども実施。環境活動の発信拠点としての役割も果たしています。



キヤノエコテックパーク(茨城県坂東市)

サプライチェーンにおける責任ある調達活動

キヤノンは、グローバルサプライチェーンにおける社会的責任を推進する企業同盟「Responsible Business Alliance (RBA)」に加盟。RBA行動規範を採用した「キヤノンサプライヤー行動規範」を策定し、労働・安全衛生・環境・倫理・マネジメントシステムなどに配慮した調達活動をサプライヤーのみならずとも、グローバルサプライチェーン全体で推進しています。



サプライヤーとの打ち合わせ



映像ワークショップに参加するアフリカの若者たち(ケニア)

未来ある若者を育てる教育支援プロジェクト

イメージングのリーディングカンパニーとして、キヤノンは持続可能な未来を切り拓く若者の創造力や技能を磨くプロジェクトに注力しています。世界各地で写真・映像の撮影体験ワークショップを開催するほか、アフリカでは撮影や印刷のプロをめざす若者の技能習得支援を行っています。

研究開発

キヤノンは、イメージング技術を軸に、材料開発やものづくりといった価値創造の基盤となる技術、グループ会社から加わった技術など、さまざまな技術を蓄えています。これらの技術を、複合的に、自由自在にあらゆる組み合わせができるホリスティックな開発環境のもと、これからの時代の新しい価値をつくる研究開発を行っています。

技術優先のDNA

「世界一のカメラをつくりたい」とスタートを切ったキヤノン。技術で差別化を実現するという企業DNAは脈々と引き継がれています。

コアコンピタンスマネジメント

キヤノンは、業界をリードする製品・サービスを生み出す「コアコンピタンス技術」、技術蓄積のベースとなる「基盤要素技術」、商品化のベースとなる「価値創造基盤技術」を多様に組み合わせるコアコンピタンスマネジメントによって、事業の多角化、既存事業の強化を図っています。

オープンイノベーション

誰も見たことのない新しい未来をつくるために、同じ志をもつ大学や企業の知見や技術とキヤノンの技術を掛け合わせるオープンイノベーションやアライアンスの活用を積極的に推進しています。

くわしくは
テクノロジー
サイトへ



これまでになかった製品のために 自ら材料開発

光学ガラスやレンズコーティング、色材、導電材料や伝熱材料など、キヤノンは優れた製品のキーとなる材料を自ら開発してきました。研究を重ねてきた材料特性をデータ化し、「材料バンク」に蓄積。必要な材料の分子構造をAIで導き出す材料インフォマティクスや分子シミュレーションを駆使して、事業の競争力を高めるキーマテリアルを効率よく開発しています。

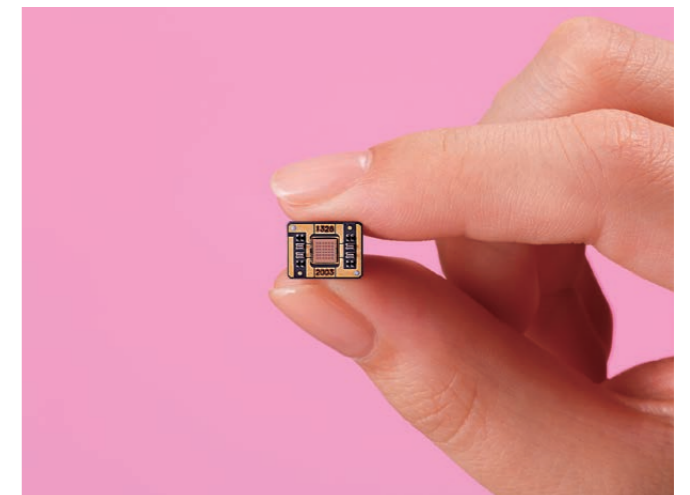


有機EL材料の研究開発

世界をリードする最先端デバイスをつぎつぎと開発

自社開発・生産の技術力を強みに、SPADセンサー(→P27)やCMOSセンサー(→P28)、インクジェットプリントヘッドなどを製品化してきたキヤノン。2022年には、「未踏の電磁波」と呼ばれるテラヘルツ波[※]の超小型半導体光源の開発に成功。これからも世界をリードするデバイスを開発し続けます。

※ 電波と光の中間の周波数帯にあり、電波の透過性と光の直進性をあわせもつ電磁波



開発した半導体テラヘルツ光源

レンズやセンサーの特性まで考えた画像処理技術を追求

長年にわたりカメラを開発・生産してきたキヤノンでは、「本来の見た画像・映像」のための画像処理技術を追求し続けています。ディープラーニングを使った画像処理では、カメラ・レンズの開発で蓄積した膨大な画像データを利用。レンズやセンサーの特性まで考慮したノイズ除去や色補正、階調補正を実現するとともに、ネットワークカメラ用の画像処理では、霧やもやの除去、夜間でもクリアな補正ができる「画像鮮明化技術」を実用化しています。



霧・もやにより鮮明度が低下した画像



鮮明化処理補正を施した画像

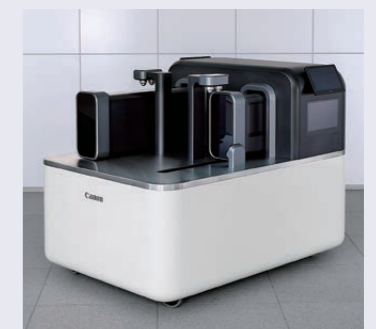
自家iPS細胞樹立^{※1}・培養プロセスの自動化を研究開発

自分自身の細胞からつくる「自家iPS細胞」は、再生医療における課題のひとつの免疫拒絶反応のリスク最小化に貢献すると期待されています。

キヤノンは品質管理・製造技術と医療機器開発実績を生かし、低コストかつ安定した品質の自家iPS細胞の樹立・培養を、公益財団法人京都大学iPS細胞研究財団と共同で研究^{※2}。血液からiPS細胞のもとになる細胞だけを分離し、iPS細胞を樹立・長期間培養までの一貫したプロセスを自動化する装置の実用化をめざしています。

※1 細胞が性質を保ったまま、安定的に増殖・培養できる状態にすること

※2 2019年に国立大学法人京都大学iPS細胞研究所と開始した共同研究が、2020年発足の公益財団法人京都大学iPS細胞研究財団に継承されています



Canon EXPO 2023で展示した自家iPS細胞製造装置(模型)

生産・品質

究極のものづくりをめざして自動化・内製化をさらに推進する一方で、熟練の技能を継承、生産現場の創意工夫の活性化にも積極的に取り組んでいます。そして、お客さまからの信頼・期待に応えて満足いただくために製品ライフサイクル全体で「キヤノンクオリティ」の維持・向上に努めています。

マザー工場の確立

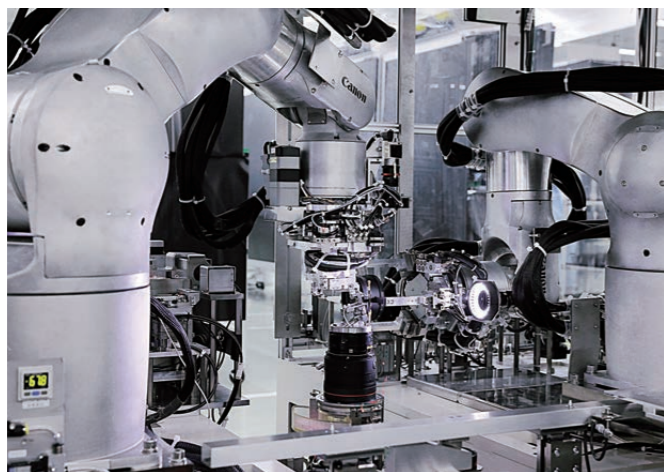
世界中の工場の手本となるのがマザー工場です。開発、設計、生産技術、製造の各部門が一体となって自動化や内製化をはじめものづくりのあり方を日々進化させています。

知恵テク

徹底的にムダ取りした生産設備を自ら考え、自らつくるキヤノンの現場力の象徴です。治具や工具のみならず、高価な装置の代替設備もつくり出します。

ノークレーム・ノートラブル

1964年に初めて掲げられ、いまでも変わらないキヤノン品質の基本理念です。製品・サービスの安全・安心・満足の追求、独自の品質マネジメントシステムの確立など、いつの時代もさらなる品質の向上に努めています。



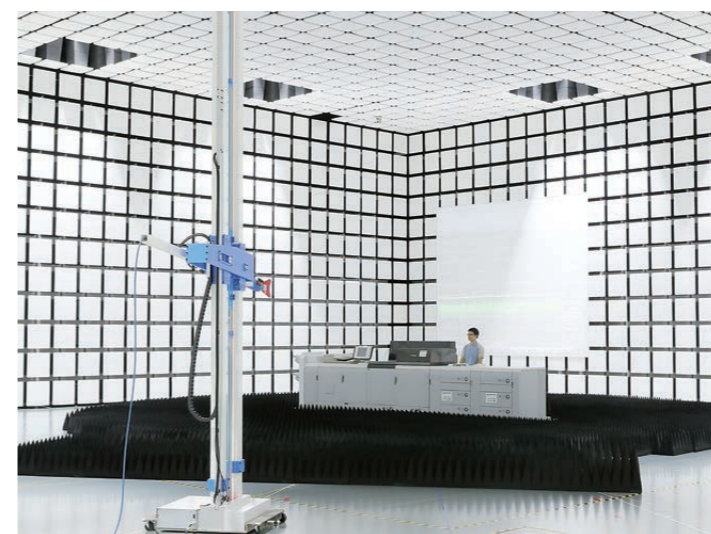
交換レンズの自動生産ライン

内製化や生産の自動化をさらに強化
ものづくりへのこだわりはキヤノンの大きな強みとなっています。品質とコストダウンの両立のために、キーデバイスやキーパーツにとどまらず、生産や検査に使う装置まで内製化する一方、自動化のしやすさを想定して製品設計し、製品組立、検品、仕分け、梱包まで自社で開発・生産した装置で自動化を行っています。

くわしくは
ものづくり
サイトへ



くわしくは
品質サイトへ



電波の影響を受けない電波暗室で行われるデジタル商業印刷機品質試験

キヤノンクオリティを妥協なく追求

お客さまの安全・安心・満足という「キヤノンクオリティ」の維持・向上のために、公的規格や関連法規に対応した品質試験設備を完備し、社内で厳しい品質試験・品質管理を行っています。さらに、法規制やセキュリティ環境の変化に迅速に対応できる体制も整えています。

世界中に効率よく迅速に製品やサービスを届ける世界最適地生産

社会・経済情勢の変化にあわせて国や地域ごとに違いがあるインフラ状況、コスト、税制、物流手段、労働力、サプライチェーンなどを総合的に判断。災害時などでもスピーディかつ的確な対処ができる、最も合理的な拠点で生産します。



インクジェットプリンターの生産を担うキヤノンハイテクタイランド



レンズ研磨の名匠(宇都宮工場)

ものづくり技能を磨いて継承する「名匠」「マイスター」

卓越したものづくりの技能をもつ「名匠」、幅広い技能と知識で製品組立や部品加工の進化に貢献する「マイスター」をキヤノンとして認定。次の世代に「技」を伝えるとともに、優れたノウハウは自動化などの、ものづくりの進化に活かされています。

マーケティング

キヤノンの製品・サービスを世界のすみずみにお届けするマーケティング会社。

それぞれの地域の特色にあわせ、お客さまとのつながりを強化。

キヤノン製品の枠にとどまることなく、お客さまのニーズに応えるソリューションを提供しています。

AMERICAS

北米、中南米地域のマーケティングを統括するキヤノンUSA。

動画配信需要の高まりをとらえて、「EOS R SYSTEM」や「CINEMA EOS SYSTEM」を拡販するとともに、商業印刷では、米国全州をカバーする高品質なサービス体制を築き、お客さまから高い評価を得ています。

バージニア州の開発・生産拠点では、オープンイノベーションを通じて、蚕のまゆを構成するたんぱく質「シルクフィブロイン」水溶液の量産体制を確立。医療・食品などの用途の開発を進め、新ビジネス創出に挑んでいます。



生産・材料設計技術を生かしてシルク水溶液の量産体制を確立

くわしくは
[キヤノンUSA
サイトへ](#)



ASIA & OCEANIA

中国やインドをはじめ、南アジア、東南アジアまでを統括するのが、キヤノン中国とキヤノンマーケティングアジア。

特に重要市場と位置付けるインドで2023年、ムンバイ、コルカタに「ライブオフィス」を開設し、ユースシーンに応じた新たな商品体験を提供。さらに、「in China, for China」を掲げる中国市場では、より市場にあった製品、マーケティングを展開しています。また、「第19回アジア競技大会」(中国・杭州)には外資企業唯一のオフィシャルスポンサーとして参加。キヤノンブランドのさらなる認知を図っています。



オフィシャルスポンサーとして協賛したアジア競技大会では、キヤノンカメラが大活躍

くわしくは
[キヤノン中国
サイトへ](#)



くわしくは
[キヤノン
マーケティング
アジアサイトへ](#)



EMEA

ヨーロッパ、中東、アフリカのEMEA地域、約120の国・地域でビジネスを展開するキヤノンヨーロッパ。

商業・産業印刷、オフィスデジタルサービス、BtoBイメージング領域で事業を拡大する一方、新興地域の開拓を進めています。

ラグビーワールドカップ2023フランス大会では協賛を通じてEMEAのブランドパーパス「Imaging to transform our world」を訴求。プロフォトグラファーのサポートとともに、出場国・地域の若手写真家を育成するメンタープログラムなども実施しました。



商業・産業印刷の展示会を主催し、将来を見据えたビジネス支援を提案

くわしくは
[キヤノン
ヨーロッパ
サイトへ](#)



JAPAN

キヤノン製品と独自のソリューションを提供するキヤノンマーケティングジャパングループ。

マーケティングの力で未来を創る「未来マーケティング企業」として、キヤノン製品とITソリューションを組み合わせた事業を展開するとともに、新たな事業の創出に取り組み、社会課題解決の領域をひろげています。

そして「パーパス」として掲げる「想いと技術をつなぎ、想像を超える未来を切り拓く」の実現に向け、イメージングとITの技術力、顧客基盤、人材力といった強みを生かし、新しい価値創造に取り組んでいます。



リアルとオンラインのハイブリッド式イベントを通し幅広いお客さまへ提供価値を訴求

くわしくは
[キヤノン
マーケティング
ジャパングループ
サイトへ](#)



Canon